

市民と医師が語り合う

初の試み 不安の声多数

「市民と医師が語り合う地域医療」と題した意見交換会が1日、アミューゼ柏で開かれ、市民ら36人が参加した。意見交換で地域医療のよりよい形を模索する狙い。柏市と柏市医師会の共催で在宅医療と小児医療にテーマを絞って行った。市や医師会から現在、豊四季団地で進められている在宅医療システムや地域包括ケアシステムの目的や将来性などについて説明されたのち、参加者の質問に答える形式をとった。

高齢化で求められる

在宅医療整備

参加者からは、在宅医療の持続性や24時間365日態勢の実現について疑問を投げかけられる場面もあり、医師会は、豊四季台団地をモデルに在宅医療の汎用化を目指してい

る現状を説明した。

柏市の高齢化率の速度は、現在の人口の20割に對し、20年後に32・4割と全国平均を上回る速さ。一方で、医療環境は充実しておらず、高齢化社会において在宅医療の充実が急務だといふ。對策として、在宅医療にお

ける医療側の負担を軽減し、従事者を増やすなど汎用的システム構築を目指すとした。

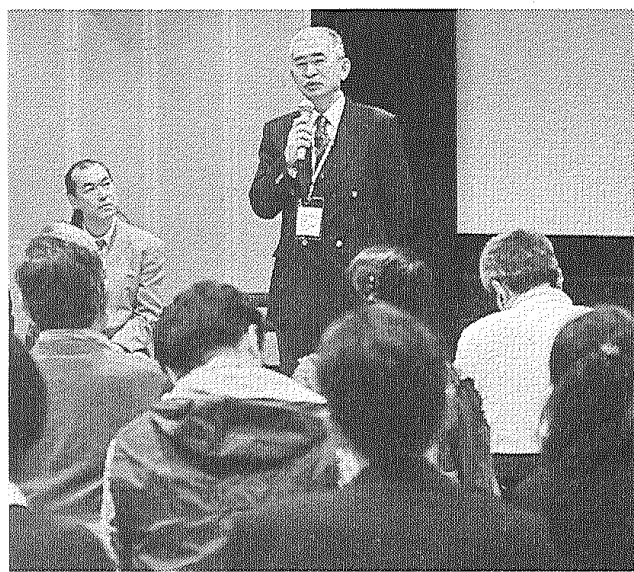
一方で、すでに在宅医療に取り組んでいる誠和クリニックの白石一也医師はインターネットを介して医療従事者と関係者の連携を図っている現在の在宅医療現場を解説し、「ネットを使えば効率もよく、問題なく対応できる」と強調。市内では24時間体制をとっている在宅医療支援診療所は15か所あり「実際に取り組んでいる医師はいる。気軽に相談してほしい」と呼びかけた。

不十分な

小児医療環境

小児医療では、市内の不十分な医療環境を不安視する声が目立ち、「情

報提供も少ない」や「指定の病院が満床ならどうすればいいか」などの質問が多かった。市内では昨年、市立柏病院に小児科が設置され、現在3人まで常勤医師が増えた。しかし、夜間と休日診療には8人が必要とされ、実現は困難な状況だ。そのフォローにウェルネス柏での夜間診療が挙げられ、市も「周知徹底していく」とした。



市民と意見を交わす柏市医師会の金江清会長

意見交換し

医療の充実めざす

参加した佐瀬洋子さん(70)は、市の方針や在宅医療に取り組む医師の言葉に「不安が少しとれた」と安堵の表情。山本澄さん(70)は現状の小児医療環境を知り「妊婦への声かけ運動など多くの支援が必要と感じたので、積極的に参加したい」とした。

柏市医師会の金江清会長は「医療関係者だけでなく、市民の皆さんの声を聴くことで気付きがある。取り組みに活かしていきたい」。今後については、継続しての開催を目指すとした。